

JC幼な妻の子作りエプロン大作戦♪  
～とろとろおまんこにハチミツを添えて～

シチュ…ある日の夜、愛衣は同い年の友人と電話で子作りについて色々相談していたのだった……

愛衣 「あ、もしもし？ ゆうちゃん？ ごめんね？ こんな夜遅くに」

愛衣 「うん、丁度彼がお風呂に入っていったから、相談するなら今しかないかなって……」

愛衣 「そう……お昼にもちよつと話したけど……うん、子作りのこと」

愛衣 「少子化対策で結婚年齢が大幅に下げられて、出産成功率も99%まで上がってきて皆J×になる前には結婚して子供産み始めてるでしょ？」

愛衣 「ゆうちゃんだってつい最近また妊娠してもう2人目になるし……」

愛衣 「私もあと二年でJ×になっちゃうのに、そういうエッチな事ってまだ恥ずかしくて……でも彼との赤ちゃんは欲しいし……もうどうすればいいのか分かんなくなっちゃって……」

愛衣 「……え？ 愛衣は可愛いんだから脱いで誘えば一発って……そ、そんな事恥ずかしすぎて……うう……もう！ ゆうちゃんのバカア！」

---

愛衣

「彼とはこの前結婚したばかりだし、いつも遅くまでお仕事頑張ってくれてるからそんな、エ、エツチに誘って疲れさせるなんて……私にはできないよお……」

愛衣

「ふえ？ うう……確かにこのままだとさなの子供がいない生き遅れになっちゃうけどお……でも、それでも……うう……」

愛衣

「参考までに聞いてみたいんだけど、ゆうちゃんはどうやって旦那さんと子作りエツチに踏み込んだの？ 最初は恥ずかしくなかった？」

愛衣

「旦那さんとの子供を思い浮かべたら幸せな気持ちに溢れて、想いのままにお互いを求めたらいつの間にかエッチ三昧の日々を送ってた……って、あはは……流石ゆうちゃんだね。リビドーで生きてるって感じが凄い伝わってくる……」

愛衣

「でもそっか。大好きな彼との子供が生まれた未来を想像する……えへ、えへへっ、えへへへへっ♪」

愛衣

「……あっ！ ご、ごめん！ ちょっと妄想してだらしない声出ちゃった！ って、ああ！ そんなに笑わないでよ！ もう！」

---

「……まあ、でも確かに彼と子供と三人で過ごす時間を見ると、胸の中がぽかぽかして幸せな気持ちでいっぱいになるっていうのは分かるなあ……絶対子供欲しいって思えたもん♪」

「そっか……この幸せな時間を現実にするためには  
恥ずかしがってないで、彼と毎日作りセックス  
しないといけないんだよね……」

「……うん、決めた！ 明日は学園も彼の職場もお休みだし、絶対子作りセックスする！ 私も彼の幼な妻としてちゃんとしたママになって見せる！」

「えへへ、ゆうちゃんありがとう♪ ゆうちゃんと  
お話出来て、私やっと彼とセックスする決心がつ  
いたよ!」

「……ん？　最後に私にアドバイス？　なにな……  
……って、彼を確実に堕とすエッチな誘惑術？  
え！？　そんなものがあるの！？」

「それって私でも簡単に出来るのかな!?　ねえ、教えて教えて!」

「……うん……うん、うんうん……うん？ え、それって……えっ、ええええええええ！！??」

シチュユ… 早朝、旦那様と一緒にのベッドで寝ていた愛衣。目を覚めていつも通り起こそうとするが、今日はいつもと違ってエッチな起こし方をするようで……

舞台… 寝室(8畳程度)の木製ダブルサイズベッド上

服装… 主人公『寝巻薄手「シャツ」』 愛衣『エッチというよりは可愛い感じの薄手キャミ』

愛衣

「ん、んん……んっ……ふああ(欠伸)……ん……もう、あさあ……？ んにや……昨日ゆうちゃんと長電話しちゃったからちよつと眠いかもお……ふああ……(欠伸)」

愛衣

「ん、えへへ♪ おはよう、あ・な・た♪ ……つて、まだお休み中かな。昨日もお仕事遅くまで頑張ってたもんね……いつも家庭の為に頑張ってくれてありがとうね♪ ん、ちゅっ♪」

愛衣

「えへ、えへへへ♪ 朝からお耳にチューしちやった♪ ちよつと大胆すぎたかな……？ でもゆうちゃんも積極的にいかなきゃダメって言ってたし……」

愛衣

「そうだよ。絶対に子作りエッチするって決めたんだから、こんなところで恥ずかしがってちゃダメだよ。ファイトだよ、私！」

愛衣

「もっと大胆に、もっと積極的に……んん、えい！」

愛衣

「ふああ♪ 腕に抱き着いちゃった♪ 大好きな旦那様の腕……子供の私とはくらべものにならないほど立派で逞しくて……とっても安心するう」

---

愛衣

「こうやってあなたのぬくもりを感じるだけで心が  
安らいで、幸せな気持ちが胸いっぱいに溢れてき  
ちゃうの……この人と結婚して良かったって心の  
底から思えるの」

愛衣

「好き♪ すきすきすき♪ だ〜い好き♪ 世界の  
誰よりも好き♪ 愛してるよ♪ 私の愛しの旦那  
様……♪」

愛衣

「……って、ひゃああ！ 気持ちに任せてすっごい  
恥ずかしい事言っちゃったよう……！ 恥ずかし  
すぎて身もだえしちゃうう……」

愛衣

「今の聞かれてないよね？ ……つんつ〜ん……  
…ん、大丈夫そう、かな？ はあ〜〜……良かつ  
た〜まだ寝ててくれて」

愛衣

「んん〜、このまま寝てくれるなら、もうちよつ  
といたずらしてもいいよね？ 今日是一日暇だ  
し、ゆうちゃんのアドバイスを試す絶好のチャン  
スだし！」

愛衣

「確か男の人ってお嫁さんにお耳をいたずらされる  
のが大好きなんだよね……耳かきとか、お耳に  
ちゅ〜とか……そ、それに……お耳をぺろぺろ、  
とか……！」

愛衣

「ちよつとエ、エッチ！ だけど、あなたが喜んで  
くれるなら私、何でもしてあげるからね？」

---

---

愛衣 「それじゃあ、まずはお耳に……んっ……ちゅっ♪  
ちゅっ……ちゅっ……ちゅっ♪」

愛衣 「好き……好き好き♪ ちゅっ……ちゅっ……  
ちゅっ……んん……ちゅううう……ちゅっ♪」

愛衣 「あむっ、ちゅっ♪ ぷちゅっ……んっ、好きいゝ  
……大好きい……ちゅっ♪ ちゅっ……はむ、ぷ  
ちゅっ……ちゅっ、ちゅっ♪」

愛衣 「ふああ……♪ 唇じゃなくてお耳にキスしてるだ  
けなのに、胸がドキドキしちゃうよお♪ きつと  
顔も真っ赤になちゃって……ううう……恥ずか  
ちい」

愛衣 「でも好きい……好き好きい……だいちゅきい……  
んん……ちゅっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪」

愛衣 「この勢いのまま……んん、れろっ……ちゅっ♪  
ふああ♪ お耳舐めちゃったあ」

愛衣 「大人のキスもまだなのに……ひう……恥ずかしい  
よお……エッチだよお……」

愛衣 「ううう……我慢だよ私！ っていうか、私自身興  
奮しちゃってるから別に我慢する必要もない気がするけど……この想いのまま、いっぱいお耳を舐めてえ……」

---

---

愛衣

「ん、ちゅっ♪ れちゅっ……ちゅっ、ちゅぷっ……ちゅ、れろっ……はぶ、ん、ちゅっ……んちゅっ……れろっ、んぷっ……ちゅっちゅっ、ちゅぷっ……れろっ、んちゅっ、れろっ……ちゅぷっ」

愛衣

「ん……しゅきい……しゅきしゅきい……れちゅっ……れろ……れろれろっ……ちゅっ……くちゅっ……じゅるっ……ちゅっ……ちゅぱっ……はあ……はあ……」

愛衣

「あっ♪ あなたの体がピクってして……まだおねむなのに体は感じちゃってるのかな？ ふふっ♪ いつも凜々しくてかっこいい姿ばかり見てきたから、こういう可愛い姿は新鮮かも♪」

愛衣

「もっとあなたの可愛い姿を見せて？ いっぱい私のちっちゃな舌で感じて？」

愛衣

「ん……ちゅっ♪ ちゅっ……ちゅぱっ……ぴちゅっ、くちゅっ……ちゅっ、れろ……れろれろ……ちゅぷっ、くちゅっ♪」

愛衣

「もっと……ん、れろっ、くちゅぴちゅっ……ちゅっ……んちゅっ……れろっ……れろれろっ……ん……ちゅぱっ……んっ……れろっ……くちゅ……」

---



---

愛衣

「しゅきい……愛してる……ちゅっ……れる、んゝ  
ちゅぷっ……はむぷちゅっ……ちゅっ、れる……  
ちゅっ……ちゅぷっ……ちゅうゝゝ……」

愛衣

「ぷはっ……ん、ちゅっ……はあ、はあ……まだ起  
きないのかな？ いつもだったら少しゆするだけ  
で起きてくれるんだけど……ちゅっ……ちゅっ、  
ちゅ♪」

愛衣

「えへへ♪ 大好きなあなたを一方的にペロペロ出  
来る機会なんて中々ないだろうし、まだ眠ってく  
れてる今なら、もっともゝっと沢山ぺろぺろ出来  
るかも♪ ふへへゝゝ♪ しあゝせゝ♪」

愛衣

「んゝちゅっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪ れろゝゝ……  
……ちゅっ♪ れろれろ……ちゅっ、ぷちゅっ……  
んんゝくちゅぴちゅっ……ちゅっ、れるれるれる  
……はむっ……すきいゝ……ちゅっ、ちゅっ♪  
すきすきいゝ大好きいゝゝ♪」

愛衣

「ん、ちゅ……！ ちゅぷっ、れるっ、んんっ！  
くちゅっ、ちゅぷっ、じゅぶぶっ……！ れろれ  
ろ……！」

---

---

愛衣

「ふううう……♪ えへへ♪ お耳ぺろぺろしたおかげであなたのお耳ぴかぴかになっちゃった……っていうよりは私の唾液でベトベトになっちゃったっていった方がいいのかな……？ 何だかこう、お嫁さんしてるって感じが凄くて……はうううう……幸せすぎるよお♪」

愛衣

「好きになってくれてありがとう♪ 結婚してくれてありがとう♪ 私はね、あなたのおかげで幸せいっぱいだよ♪ ん～ちゅっ♪」

愛衣

「あはは♪ 寝てるのに体もぞもぞしてる♪ 囁かれて嬉しいんだ♪ じゃあ寝ているうちに反対側のお耳にもいっぱいちゅっちゅぺろしてあげる♪」

愛衣

「ん、しょ……っと……ふうう……えへへ♪ あなたの愛衣がこっちのお耳にも来ましたよ～♪」

愛衣

「ん～ちゅっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪ 好き♪ すきすきい♪ お耳もぺろぺろしてあげるね♪ あ～むっ♪ ちゅっ、くちゅっ……れるっ、れるれるれる……ちゅう、ちゅっ♪」

---

---

愛衣

「れろっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪ ぴちゅ、くちゅ……！ んんっ！ はあ、んっ……はあ……れろれる……ふう、始めより大分大胆になってきちゃったかも♪ 私って自分が思ってる以上にエッチな事が好きだったみたい♪」

---

愛衣

「私をこんなエッチな子にしたのはあなたなんだからね？ あなたが素敵すぎるから……あなたが私をこんなに魅了しちゃうから。だからね？ 愛衣のお耳ご奉仕、いっぱい受け止めて♪ 思う存分感じて気持ちよくなっ♪」

---

愛衣

「あむっ、ちゅっ……れろっ、ちゅう、ちゅっ♪ じゅるっ、じゅりゅりゅ……ちゅううう……んちゅっ♪ れるっ、んちゅっ♪ ちゅぷくちゅっ♪」

---

愛衣

「ちゅっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪ 好き♪ すきすき♪ 大好きい♪ すきい♪ んちゅっ♪ 誰よりも好き♪ ちゅっ♪ ちゅぷっ♪ れろれる……じゅりゅりゅ……んちゅっ♪ 愛してる♪ 愛してるのお……♪」

---

愛衣

「結婚してくれてありがとう♪ 大好きになっれてありがとう♪ んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、しゅきい……♪ ちゅきい……♪ だいちゅきい……♪」

---

愛衣

「れる、ぷちゅっ♪ ちゅっ、くちゅっ♪ れろっ、れろれる……愛してるよ……じゅりゅじゅりゅ、ちゅううう……!」

愛衣

「んっ、ちゅっ♪ ふにやああ♪ 蕩けるくらい甘い気持ちでいっぱいだよ……♪ すきい♪ すきすきい♪ だいしゅきい……♪」

愛衣

「好きすぎて、気持ちが溢れすぎて、ううう……もっと抱き着いちゃう! えいっ♪ ぎゅうう……♪」

愛衣

「えへへ……♪ こっちの腕もあつたかくて気持ちいい。首元も……すんすんっ……ふあああ♪ 男の人の匂いだ……♪」

愛衣

「私の、私だけの旦那様の匂い……愛しの人の匂い……これ好き……♪ すんっ、すんすんっ……すうう……はああ……♪ ずっと嗅いでるとどうにかなっちゃいそう♪」

愛衣

「あ、首元に汗が垂れて……んっ、れろっ♪ えへへ、舐めちゃった♪ ちよっとしよっぱいけど、おいしい♪」

愛衣

「もっと胸の方も舐められるように、上に移動して……わっ! あなたの顔の目の前にきちゃった。これ、キ、キス、できちゃう距離、だよね……」

---

愛衣

「じー……んっ、良かった。まだちゃんと眠ってくれてるみたい。わぁ♪ いつ見ても素敵でかつこいい顔だな」

愛衣

「私と出会うまでお付き合いの経験がなかったなんて今でも信じられないよ……こんな素敵な旦那様なのに、世間は見る目がないよね」

愛衣

「好き、好きだよ、あ・な・た♪ ちゅっ♪ ちゅっ♪ ちゅっ♪ ふへへ♪ 唇にもキスしちゃった♪」

愛衣

「寝てる間に乾燥しちゃったからか、あなたの唇ちよっとカサカサしてる……もっとキスして潤してあげるね♪」

愛衣

「んっちゅっ♪ はっっ、んちゅっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪ すきい……ん、すきっ！ ちゅっ♪ れろっ、れろれろ……ちゅうっ♪ ちゅっ！」

愛衣

「はぁ、ほんと好き、大好き♪ いっぱいすりすりしちゃう♪ すりすり♪ すりすり♪」

愛衣

「好きい……んちゅっ♪ すきすき♪ ちゅっ、ちゅうっ♪ ちゅっ♪ はむ、んちゅっ♪ ちゅうっ♪ ちゅっ♪」

---

---

愛衣

「はああ♪ 朝からいっぱいあなたを堪能しちゃった……ふへっ、ふへへ♪ やっ、ダメ、変な笑いが出ちゃう……でも、嬉しすぎてにやけが止まらないよお……ふへへへ♪」

愛衣

「万が一こんな顔をあなたに見られちゃったりしたら、きつと恥ずかしくて恥ずかしくてどうにか なっちゃうかも。普段だったら絶対起きてる時間 だけど今日は寝坊助さんで良かったあゝゝ♪」

愛衣

「ん、あれ？ 体が揺れてる？ 地震かな？ ちよつと大きいかも。流石に早く起こしてあげないと……って、ふえ？」

愛衣

「あ、あなた……え、目が開いて……え？ 起きてる、の？ ふえ？ いつの間に？」

愛衣

「あ、そうか！ 今起きたんだよね！ 今の地震のせいで起きたんだよね♪ うん、そうだよね！ そうに違いないよね♪ えへへごめんね、胸の上に乗っかっちゃって♪」

愛衣

「え、今の揺れは地震なんかじゃなくって、あなたが身じろぎしただけ……」

愛衣

「……あ、え？ じゃ、じゃあ……も、もしかして、ほんと最初から起きてた……とか？ そんなことは、ないよね？ え、いや……え？」

---

---

愛衣

「耳舐められた辺りで流石に目が覚めてた……って  
……ふ、ふにやああああああああ  
ああああ……！」

愛衣

「にやつ！ にやつ！ にやあああああつ！！  
や、ダメ！ 恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥  
ずかし……い……！」

愛衣

「ほとんど最初から聞かれてたってことだよねそ  
れ！ あんな、耳元でスキスキ言ったり、愛して  
るって言ったり、あまつさえ『マーキングしちゃ  
う♪ てへっ♪』なんて言ったりいいいい  
いい……！」

愛衣

「『てへっ♪』は言っていないだろう……って！ そ  
ういう細かい事はどうでもいいの……っていう  
か、そんな細かいこと覚えてるくらいはつきり目  
が覚めてたんだあ！」

愛衣

「ずっと、ずうう……と！ 私が恥ずかしい事し  
てるのを狸寝入りしながら聞いてたんだ！ も  
うっ！ バカバカバカバカッ！ あなたのバカ  
ッ！ でもスキィ……！」

愛衣

「はむッ！ ちゅッ！ ちゅううう……ッ！！  
んんっ……ぷはっ！ はあ、んもう……バカア  
……今の私絶対顔真っ赤っかだよ……ばかば  
かあ……（弱弱しく）」

---

---

愛衣

「あう……ごめんね？　ちょっとまだ気持ちの整理が出来てないから……もうしばらくこうやって抱き着かせて？　あなたの胸、私に貸して？」

愛衣

「あ……えへへ、抱きしめてくれてありがとう。」

ふあああ……落ち着くう……やっぱり寝てるあなたを一方的に抱きしめるよりこうやってお互いに抱きしめあう方が断然すき……愛されてるっていうのが分かるのお♪」

愛衣

「はふう……ふう……ん……段々落ち着いてきたかも……ああんもう……ゆうちゃんの言う通り積極的になってみたけど、調子に乗りすぎちゃったよう……」

愛衣

「ふえ？　あ、うん。その、今日はね？　あのう、お互いお休みですと一緒にいられるでしょ？　だから、その、色々普段できないような事をしてみたいなって思ってた……」

愛衣

「……うん、そうなの……朝起きたら目の前に愛しい旦那様の寝顔があって、気持ちが高っちゃって……つい、ね？　でも今日は一日あなたの事いっぱい気持ちよくしてあげたいって思ってたから……頑張っちゃった、みたいな？」

愛衣

「あはは……もしかして、こんなエッチな私は嫌いになっちゃった、かな？」

---



---

愛衣

「あ、きゃんッ！？ わっ、そんな強く抱きしめられちゃっ……ひゃううう……これはこれで恥ずかしくなっちゃうう」

愛衣

「うん、うん……嬉しい♪ 私も大好きだよ♪ あなた以外の人を好きになるなんて想像できないくらい、だいだいだくくいきすき♪ 心の底から愛してる♪ ほんとだよ？ えへへ♪」

愛衣

「まだ二日が始まったばかりなのに、すでにこんなに幸せいっぱい……どうにかなっちゃいそうだよおっ♪」

愛衣

「えへへっっ♪ いつまでもずっとこうしていたいけど、もうお日様も大分昇っちゃって、お昼になっちゃいそうだね」

愛衣

「ん、しょっと……そろそろ着替えて起きよっか♪ お腹も空いてきた頃だと思っし、ご飯作らなきゃだしね」

愛衣

「あっ！ でもご飯作ってる間はリビングに来ちゃダメだからね！ 絶対ダメだよ！」

愛衣

「え？ なんで……って言われると、そのう……ひ、秘密！ 今日の料理にはサプライズがあるから秘密なの！ って、わっ！ サプライズって言っちゃったらサプライズにならないよう……」

---

愛衣

「とにかくっ！ 私が入ってきていいよって言うまで来ちゃダメだからね！ 絶対だからね！ もし約束を破ったりなんかしたら少しの間だけ口をきいてあげないんだから！」

愛衣

「うん、えへへ♪ 分かってくれたみたいでよかった♪ ごめんね？ 急にこんなこと言い出して」

愛衣

「でも、期待してくれていいよ？ ゆうちゃんもこれならきつとあなたを満足させられるって言うってたし。今日はあなたの為に何でもしてあげちゃうんだから♪ 楽しみにしててね♪」

●トラック０３：

シチュ…料理が完成し主人公をリビングに呼び出す愛衣。そこには何と裸エプロン姿で完成した料理をテーブルに置く愛衣の姿が……

舞台…広さ△置程度のマンションリビング

服装…主人公『薄手『シャツ』 愛衣『裸エプロン』

愛衣

「あ、はゝい！ ご飯の準備は出来てるから入ってきて……って、いや、やっぱりちょっと待って！ ちょっと落ち着かせて！」

愛衣

「すうゝゝ……はあゝゝ……すうゝゝ……はあゝゝ……うん、よし！ 絶対大丈夫！ 恥ずかしくない、恥ずかしくない！」

愛衣

「うん、いいよ。今度こそ入ってきて……いい、けど……引かないでね？ 絶対引かないでね！ お願いッ！」

---

愛衣 「お、おはよう……あなた……」飯出来てるから、  
い、一緒に、食べよ？」

愛衣 「うう……そんなところで固まってないで何とか  
言ってよお」

愛衣 「やっぱりこの恰好変だったかな？ 裸にエプロン  
だけなんて……ちよつと動いただけでいろんなと  
ころが見えちゃいそうだし、お尻なんて常に丸見  
えになっちゃってるしい……」

愛衣 「引いた？ 引いちゃった？ うう……ゆうちゃく  
ん、裸エプロンなら絶対いちころだって言ってた  
のに引かれちゃったよう……（しょんぼり泣い  
ちやうような演技で）」

愛衣 「わっ！？ え、急に抱き着いてきて……ふえ？  
引いたわけじゃなくて私が可愛いすぎて見惚れて  
た……って……え、本当？ その場限りの言い訳  
とかじゃなくて、本当に見惚れてくれたの？」

愛衣 「ふああ♪ ううう……良かったあ……頑張って恥  
ずかしい思いして挑戦してみた甲斐があったよお  
……ゆうちゃくん、アドバイスありがとう……  
……」

---

---

愛衣

「んへ、えへへ♪ そっか、気に入ってくれたんだあ……じゃあ、今日は一日ずっとこの恰好でいてあげるね♪ すっごい恥ずかしいけど、せっかく着たんだもん。新妻の正装って言われてるみたいだし、今日の私はあなただけの裸エプロン奥さんだよ♪」

---

愛衣

「いっぱい私の裸エプロンを堪能して？ いっぱい私の事を愛して？ ん、ちゅっ♪ ちゅっ♪ んちゅっ、ちゅっ……くちゅっ、ぴちゅっ♪ んるろ、れろれろ……ちゅうううう……ぷはっ♪ はあ、はあ……」

---

愛衣

「ん、気持ちに任せて思わずキスしちゃった……えへへっ♪ 唇合わせただけなのに、すっごく気持ちよくなっちゃう……」

---

愛衣

「んっ……はあ……んんっ……や、なんか朝にいっぱいペロペロしたのもあってか……おまたのところがむずむずしちゃって……んんっ……ふう……はあ、はあ……エッチな気分になってきちゃったかも……」

---

愛衣

「あなたはどうか？ エッチな気分になってくれる？ って、あっ……ズボンが膨らんで……んっ、あなたも私に興奮してくれたんだ……嬉しい♪ それじゃあね？」

---

愛衣

「今日はこのままいっぱいエッチしょ？ 裸エプロン姿の愛衣をいっぱい愛して♪」

愛衣

「ふえ？ 何の音？ って、あ、そうだ！ 忘れるところだったよ！ まだご飯を食べてなかったんだった！」

愛衣

「うう……ごめんね？ このままいっぱいラブラブエッチするつもりだったのに……でもせっかく作ったご飯が冷めちゃうのも嫌だし、あなたにいっぱい私の料理楽しんでほしいから、エッチの前にまずはご飯食べちゃおう？ ……それでね？ えっと、その……」

愛衣

「ご飯食べ終わったら、食後のデザートに愛衣をいっぱい食べて？ 柔らかくてあま～い愛衣の体、残さず味わってね♪」

●トラック０４：

シチュ…昼食も無事食べ終わり、いよいよ最後のデザートとして愛衣をいただきます……

愛衣

「ふう……これでお昼の後片付けも終わり、っと……って、ひゃわッ!？」

愛衣

「あうう……そんな急に抱きしめてきて……えへへ♪ もう我慢できなくなっちゃった？」

---

愛衣

「そうだよ。朝からいたずらされて、私の裸エプロンを見て、いっぱい精のつくものをあ〜んって食べさせられて……これだけされたらエッチしなくてしたくて堪らなくなってきたやうよね？」

愛衣

「……うん、そうだよ？ 愛衣ね？ 昨日の夜からあなたとエッチする事ばかり考えてたの……まだ子供で学生の私の代わりにいつも夜遅くまでお仕事頑張ってくれてるあなたに、少しでも元氣になってほしくて……」

愛衣

「あ、いや、でも……もちろんあなたに元氣になってほしいっていうのも嘘じゃないんだけどね？ 本当の目的はちよっと違うの……」

愛衣

「……本当はね？ あなたとの、その……赤ちゃんがね？ 欲しいな、って思ってた……いっぱいあなたの精液を、私の子宮にぴゅっぴゅしてもらいたくて、色々頑張っちゃった……♪」

愛衣

「……うん、ゆうちゃんに相談したらね、新妻は裸エプロンで旦那様を誘って沢山孕ませエッチすれば確実に妊娠するって言って……はじめはすっごく恥ずかしくて、引かれたらどうしよう……って不安でいっぱいだったけど、ふふ♪ こんなに強く抱きしめられて求められてるなら、やってみて本当に良かったよ♪」

---

---

愛衣

「えへへ……♪　ね、食後のデザートの前に、口直しのちゅーしょ？　お口のなか、私がいっぱいぺろぺろして綺麗にしてあげる♪」

愛衣

「ほら、ん……ちゅっ♪　……ちゅっ、ちゅっ♪　もっと口開けて？　んーちゅっ、舌らひてえ……れろっ……んちゅっ、れろれろ……れろれろれろ……」

愛衣

「……ちゅっ……ちゅぷっ……すき……ちゅっ……ちゅっ……んー……ちゅっ……ちゅっ……はあ……大好き♪　ちゅっ……ちゅっ♪」

愛衣

「はあ……ラブラブキスう……しあ……せ……♪　すきっ、愛してる♪　ちゅっ♪　んーちゅっ♪」

愛衣

「いいよ♪　あなたも我慢の限界だろうし、なににより私がもう我慢できなくなっちゃって……おまんこがね？　あなたのおちんぽ欲しがっちゃててね？　……エッチなお汁ぴちやぴちや垂らしちゃってるの。……ほら、エプロンの内側、触ってみて？」

愛衣

「ひゃんっ！？　あ、あなたの指がおまんこに触れて……きゃんっ！？　や、らめえ……今敏感になつて……ダメ、そんな指でおまんこ虐めないでえ……」

---

---

愛衣

「やんっ!？ や、反対の手でお尻まで……ほんとにダメ、ダメだってばあ……おまんことお尻もみもみされちゃ、気持ちよすぎて変になっちゃうう……」

愛衣

「あっ、やっ、あっ♪ 太もも撫でられて、愛液掬い取られて……ひう!？ や、ダメ! クリちゃんだめえ! 皮捲られて、愛液で濡らされてえ……クリちゃんしこしこしないでえ!」

愛衣

「や、らめ……むりい……中指おまんこに入れられて、くちゆくちゆされながら、クリも虐められてえ……お尻と太もも揉まれてえ……気持ちよさで頭おかしくなる……おかしくなっちゃうのお!」

愛衣

「はあ、はあ……んっ……はあ……ねえ、もっと強く抱きしめて? 私がどこかにいっちゃわないように、あなたの胸で強く抱きとめてえ?」

愛衣

「あっ、んん、あったかい……んっ、あっ、あんっ! もう、らめ……ご、ごめんね? エッチの前に、私だけイっちゃう、かもっ!」

愛衣

「やっ! 手の動き早くなっ……! あっ……あっ……あっ……あっ! ダメッ! ほんとにイクッ! イクイクイクッ! イツツクうううううう!」

---



---

愛衣

「んひやああああああ！　んやああ！　おまんこお……気持ちよしゆぎいれえ！　やらあ……お潮吹いちゃってりゆよおお……！」

愛衣

「やあ……らめえ……お願い、止まってえ……！　おまんこからお潮止まってえ……！」

愛衣

「ひやあああああ！　やあつ！、またお潮……あつ、やんつ！　ダ、ダメええ……お潮吹いてるのにおまんこくちゆくちゆ、らめえ……愛液かき出されちゃらめなのおつ！　気持ちよすぎりゆのお……！」

愛衣

「あつ、あつ、あああつ……き、気持ちいい……こんなの知らにやいい……おまんこおかひくなりゆ……いきしゆぎて開きっぱなひになっひやううう……あつ……ひうう……」

愛衣

「あ、ああ……はひっ……んっ、んん……はあ、はあ……ふう……ふううう……ん、はあ……やっろ……しゅこしずつ治まってきひや、かも……んっ……ふううう……」

愛衣

「んんっ……もう……まだデザートの準備もしてないのにつまみぐいしちゃってえ……そんな悪い子にはデザートおあずけしちゃうよ？」

---

---

愛衣

「えへへ♪ うゝそっ♪ おあずけなんてしないからそんな悲しそうな顔しないで。私もいっぱいあなたに食べて欲しいし、何より、おいしくいただいてもらわないと子作りエッチできないもんね♪」

愛衣

「それじゃあテーブルの上にちよっと失礼しちゃうね……」

愛衣

「よっと……あはは……テーブルの上に腰かけちゃうなんて、ちよっとお行儀が悪いかも……もしママに見られてたらお説教ものだよお……」

愛衣

「でも今の愛衣はあなた専用の食後のデザートだから……人じゃなくてお料理なら、テーブルの上に乗るのは当然の事だから、許してくれるよね♪」

愛衣

「んっ、このまま仰向けになって、うう……恥ずかしいけど、こう、足を開いて、エプロンもたくし上げて……あっ、やんっ！ スースーしちゃって……ひう……やっぱり恥ずかしい……」

愛衣

「ど、どう、かな？ 愛衣のおまんこ、よく見える？ まだ毛も生えてないツルツルお子様おまんこ……あなたにいっぱい虐められたから、こんなにぴちゃぴちゃ濡れちゃってるの」

愛衣

「あんっ！ やあ……そんな顔近づけちゃ鼻息が当たってすぐったいよお……」

---

---

愛衣

「えへへ♪ デザートも気に入ってくれたみたいで良かった♪ でも、まだ食べちゃだめだよ？ まだ愛衣のおまんこデザートは完成してないの。今仕上げに入るからそのままおまんこよく見て？」

愛衣

「ん、ほらこれ。何か分かるかな？ そう、いつもパンケーキにかけてる蜂蜜だよ♪ これを、愛衣のおまんこにたらしめて……ほくら、とろ……り……♪」

愛衣

「あっ、結構冷たい……あんっ！ ひゃうう……敏感なところ……クリちゃんにもかかって……やあ、蜂蜜かけただけでも感じちゃう……」

愛衣

「ん、しょっ……ふう……これくらいでもういいかな……？ うわあ……私がやっておいてこう言っちゃうのもあれだけど、おまんこ、蜂蜜と愛液とお潮ですっごい事になっちゃってるよお……」

愛衣

「これからここを、あなたに舐めてもらうんだって考えただけで……ああ、またおまんこの穴からお汁溢れてきちゃって……まだ食べられてないのにおかわり出しちゃってるのお……」

愛衣

「ねえ、あなたも、もう我慢できないよね？ 私も早く大好きなあなたにいっぱい食べて欲しいから……愛衣の特性蜂蜜漬けおまんこ、いっぱいペロペロして、愛衣の全部味わって？」

---

愛衣

「あ……♪ あなたの顔がどんどんおまんこに近づいて……そう、そのまま……舌をおまんこに……ひゃああああんっ!？」

愛衣

「んはあっ、ああんっ! ひゃううっ! あなたの舌がおまんこにい…… あっ、ああっ……ぺろぺろされてるうっ! 蜂蜜漬けの新妻おまんこぺろぺろされちゃってるのおっ!」

愛衣

「ひううっ、あひやあっ! 舌が私の愛液と蜂蜜を吸い上げてっ! ぴちやぴちやされてえっ! あんっ! はふうう……ふああ……あああっ!」

愛衣

「んはああっ! いいっ! 気持ちいいよお! もっとぺろぺろしてっ! 愛衣のおまんこはあなただけのものなんだからあ……! あなただけのおまんこだからあっ!」

愛衣

「んんうっ! ひゃううっ! んっ、ふああっ! ああっ! 舌が熱くて、おまんこジンジンしてきちゃってえっ……ひううっ、ふああっ……あああんっ!」

愛衣

「はう……あううう……やあ……舐められたところからまたどんどんエッチなお汁が溢れてきてえ……おかわりが出てきちゃってるよお」

愛衣

「ひゃあああっ!?! あっ、あうんっ! やっ、ダメえ……おまんこのビラビラかきわけて、舌入れちゃらめえ……! やあ……ああんっ……!」

---

愛衣

「ふあああああ……！ あうう……！ そんなあ……おまんこの中まで味わわれてえ……んっ、ひやううう！ あっ、ダメ！ ダメダメえ！ そんなじゆるじゆる吸わないでえ……！」

愛衣

「やあ……らめらってばあ……デザートはおまんこの表面だけで、膣中は違うのお……！ んひやあっ！ あっ、あうう……らめなのお……！」

愛衣

「ひうううっ……あっ、やらあ……おまんこからいやらしい音出ちゃってるう……んんっ、ひやああ……あうう……ん、くうう……んひううっ！」

愛衣

「うう……あなたの舌全然止まらない……そんなおいしいの？ おまんこ、大好きなのお？ あっ、ああっ……ああんっ！」

愛衣

「いいよ、好きなだけ舐めてえ……？ 今日はおなたにいっぱいエッチしてもらうために頑張ったんだから……好きなだけ私に欲情して？ 種付けエッチの準備、いっぱいしよお？」

愛衣

「あっ！ んひやあああっ！ ああっ！ はうううっ……！ あっ、やああっ！ また舐めるの激しくなってえ……！ ああ……ひううっ！ おまんこらめえ……気持ちよすぎて熱くなっちゃうう！」

---

---

愛衣

「んううっ！ ううう……蜂蜜も舌でおまんこの奥にねりこまれてえ……私のおまんこ、膣中から甘くとろかされちゃうえよお……はううっ……ひやつ、あああっ！」

愛衣

「ひやうううっ……そんな……クリちゃんも吸っちゃ……だめだよお……！ 中でコロコロしちゃやらあっ！ うう、んあああっ！」

愛衣

「それ、ほんろにらめえっ！ んひうううっ！ ああっ、らめえ……おまんこヒクヒクしちゃう……またおまんこ吹いちゃうのおっ！」

愛衣

「ひうううっ、んんっ！ やあんっ！ あああ……あなたあ……だめえ……このままだとあなたの顔にかかっちゃうう……お潮かかっちゃうからあ！」

愛衣

「好きなだけ舐めていいって言ったけどお……はうう……これはダメえ、ひやううう……大好きなあなたの顔に潮吹きなんてえ……そんなの、恥ずかしくてダメなのおっ！」

愛衣

「あっ、ひやあああああっ！ そんなあっ！ あううっ！ ひやわあああっ！ はやい、はやいいいっ！ 舌ぺろぺろはやくて、気持ちいいのがおまんこに溢れて……あああっ！ 気持ちいいのとまらないよおっ！」

---

---

愛衣

「あっ、あっ、あっ、ああっ！　こんなのダメなの  
に……好きになっちゃう……おまんこデザ  
トペろペろ好きになっちゃうのおおっ！」

愛衣

「もう我慢できない……食べてえっ……いっぱい食  
べてえっ！　愛衣のおまんこ好きに食べて、いっ  
ぱいペロペロして、ちゅぱちゅぱ吸って、沢山気  
持ちよくしてえっ！　いっぱいお潮吹かせ  
てえっ！」

愛衣

「ああっ、あううっ！　ひやわああっ！　イクッ！  
イっちゃうよおっ！　おまんこ食べられて思  
いっきりイっちゃうのおっ！」

愛衣

「はあ、んっ、ああっ！　ふあああっ……！　ね、  
ねえ……私のお潮、このまま飲んでくれる？　蜂  
蜜と愛液が混ざった愛衣のデザートジュース、ご  
くごく飲んでくれる？」

愛衣

「ひゃっ！　あ、ああ……！　もう出ちゃうから、  
このままおまんこ舐めて？　おまんこの穴口の中  
に入れて、愛衣のエッチなジュース沢山飲ん  
で？」

愛衣

「ああっ！　イクっ、イクイクっ……！　おまんこ  
イクウ……！　ああっ！！　イツ、クウウウウ  
ウウ……！」

---

---

愛衣

「ひやあああああああつ！！ やあつ！ ダメエッ！ お潮プシャーーって出ちゃって……  
ああつ！ あなたの口の中に思いっきり出しちゃってるのおつ！」

愛衣

「ああつ！ ひやううつ！ 旦那様に潮吹きするところ見られてえ……恥ずかしい……恥ずかしいはずなのに……それ以上に気持ちいいのが止まらないのおつ！ おまんこ気持ちよすぎてお潮止まらないのおつ！」

愛衣

「ひやああんつ！ また潮出てえつ！ お願い、もっと飲んでえつ！ 愛衣のエッチなジューズいっぱい飲んでえつ！」

愛衣

「あつ、あつ、ああつ！ 腰びくびく動いちゃう……気持ちいいのでいっぱいになって、あなたの顔に押し付けちゃうのおつ！」

愛衣

「お願い！ 腰暴れないように押さえつけながらおまんこ吸ってえつ！ おまんこジューズ吸い出してえつ！ 愛衣のエッチなおまんこ沢山虐めてえつ！」

愛衣

「ああつ！ またイクつ！ イツちゃうつ！ イクイクつ、イツ、クウウウウウウ！！！」

愛衣

「ひやわあああああつ！！！！ ああつ……！！  
らめつ、もうらめえ……！！ おまんこイキすぎておかひくなりゆのおつ……！！！」

---



---

愛衣

「やあっ……おまんこお……おまんこお……！ あ  
ひっ、はひっ……ひゃうっ……はううう……おま  
んこひくひくう……おしっこの穴もぱくぱくし  
ちゃってえ……ああっ……ひうう……」

愛衣

「あっ、あっ……はあ、はあ……ふううう……  
んっ、はうっ……んん……はあうう……え、えへ  
へ……♪ 段々落ち着いてきたかも……」

愛衣

「ふうう……いっぱい愛衣の事味わってくれてあり  
がとう♪ あなたのお口、気持ちよすぎて最後ど  
うにかなっちゃうかと思っちゃった」

愛衣

「あなたは大丈夫？ 最後、いっぱいお潮吹い  
ちゃって……お口の中にいっぱい出しちゃったよ  
ね……ごめんね？ 本当は蜂蜜と愛液のおまんこ  
だけ味わってもらおうかなって思ってたのにい」

愛衣

「……ふえ？ 愛衣の潮吹きジュースもおいしかっ  
た……って……ふえええ……おいしく飲んでくれ  
たのはうれしいけど、それはそれで恥ずかしすぎ  
てどうにかなっちやいそうだよお」

愛衣

「えへへ♪ 愛衣のスペシャルデザート楽しんでも  
らえたみたいで嬉しい♪ すっごく恥ずかしかつ  
たけど勇気を出してよかった♪」

愛衣

「ふふ♪ でももっ♪ 今日はまだまだこれからだ  
よ？ 今日はあなたといっぱい子作りエッチし  
て、赤ちゃんを作る為の日なんだから♪」

---

愛衣

「今のおまんこペロペロでね？ 私すっかり発情して、子宮も降りてきちゃってるの……朝には妊娠しやすくなるお薬も飲んできてるし、今膣中出しエッチしたら確実に妊娠しちゃうと思うよ♪」

愛衣

「だからね？ いっぱい愛衣のおまんこ犯して？  
あなたのおつきくてエッチなおちんぽで、まだ『  
でちっちゃな愛衣の事孕ませて、ママにして？』

●トラック05：

シチュ…激しい前戯？の後、遂にリビングのテーブルに乗ったままの体勢で孕ませエッチをすることになり……

愛衣

「あつ、きやんっ！ え、えへへ……あなたのおちんぽがおまんこに当たって……テーブルに押し倒されたまま孕ませセックスなんて、何だかあなたに犯されてるみたいで、すっごく興奮してきちゃうかも……」

愛衣

「あなたは大人で、体もすっごく大きくて逞しくて、とっても素敵で……それに比べて、私なんてこんなに小っちゃくて、お胸もぺったんこで……女性としての魅力なんて全然ないのに……そんな私が、今はこうして素敵あなたをこんなに興奮させられてるなんて夢みたいで……すっごく嬉しいよお♪」

---

愛衣

「こんな私を好きになってくれてありがとう。こんな地味でぺったんこな私に欲情してくれてありがとう。私と結婚してくれてありがとう……!」

愛衣

「大好き……愛してるよ、私の最愛の旦那様♪  
んっ、ちゅっ♪」

愛衣

「あっ、ひゃっ、ひにやあああああん!」

愛衣

「ふあああっ……あああっ……ああんっ! おちんぽ奥まで入ってきたあ♪ あっ、ひゃううっ……ふあああっ……ああっ……はううう……」

愛衣

「し、子宮の奥まできてるのお……ん、ひううっ……赤ちゃんのお部屋まで一突きで届いちやってるの分かるのお」

愛衣

「ああ……ひゃっ、あううう……だめえ、気持ちよすぎるよお……あなたのおちんぽ素敵い……おまんこぴったり塞いじゃうデカチンポ大好きい♪」

愛衣

「このまま動かれたら、また気持ちよすぎて頭おかしくなっちゃいそう……♪ えへへ……ねえ? おちんぽおまんこの中でいっぱい動いて? 私は大丈夫だから。あなたの精液が出なくなるまで、たくさんおまんこエッチして、子宮にびゅっぴゅして赤ちゃん孕ませて? 私の事、おかしくさせてえ♪」

---

---

愛衣

「あっ、ああっ！ あっ、あうんッ！ ふああっ！  
ひやううっ！ おちんぽずん来てえっ！  
おまんこ熱くなってるう♪ ジンジン疼いちゃっ  
てるう♪」

---

愛衣

「ああっ♪ おちんぽお♪ おちんぽいい♪ おち  
んぽ気持ちいいよお♪ あなたとのラブラブせっ  
くしゅ気持ちいい♪」

---

愛衣

「ああっ……はっ、はひいっ！ おちんぽの先の段  
差が、膣中で引っかかってえ……♪ ああっ♪  
これ感じちやうのお♪」

---

愛衣

「あっ、んっ、んんっ……やつ、あっ、ああっ……  
あんっ♪ ひや、ひやううっ♪ 気持ちいい……  
♪ 感じちやうう……子宮の奥が喜んじやってる  
のお♪」

---

愛衣

「ううう……おまんこお……あっ、やんっ♪ あな  
たのおちんぽではしたなくされちゃってえ……♪  
エッチな声あげちゃってえ……♪ 恥ずかしい  
けど、それが気持ちよくてえ……♪」

---

愛衣

「ひやああっ、ああっ、やああんっ♪ もっと、  
もっと私を辱めてえ……♪ 私の事、もっとエッ  
チで厭らしい女の子にしてえ……♪」

---

愛衣

「あああっ！ ふあああっ……！ あっ、あっ、あ  
んっ♪ うう……おまんこパンパンされて頭真っ  
白になりそう♪ どこかにトんでいっちゃいそう  
だよお……♪」

愛衣

「あっ、やあっ……んっ、ひうっ♪ ね、ねえ……  
お願い……キスう……キスしてえ……♪ 種付け  
プレスしながら、私がどこかイっちゃわないう  
に、強く抱きしめて、いっぱいキスして繋ぎとめ  
てえ……♪」

愛衣

「んっ、はぶっ！？ ん、んんゝっ……んちゅっ、  
ちゅっ……ちゅっ、ちゅぶっ……れるっ、  
ちゅっ、ぴちゅっ、れろっ、れろれろ……  
ちゅっ、ちゅううゝゝ」

愛衣

「ぶはっ、はあ……んっ、ちゅ♪ えへへ、んっ、  
やっ、やっぱリキス、好きい♪ エッチしながら  
のきしゅ……とつてもエッチでおまんこうずうず  
するのお♪」

愛衣

「もっろ舌らひてえ……んっ、れりゆれりゆ……  
んっ、ちゅっ、はぶっ……れる、れろくちゅっ…  
…んっ！ んん……ちゅぶっ……ちゅっ、  
ちゅうう……ちゅっ、ちゅぶっ♪ れろれろ……  
ちゅっ♪」

---

愛衣

「んいいいっ！ ああっ！ おちんぽおっ！ おちんぽ、おちんぽ……おちんぽおっ！ んひやあっ！ あああっ！ ひやうううっ！ ！ また激しくなってえ♪ パンパンって私のおまんこ犯されてるのおっ！」

---

愛衣

「ああっ！ やっ、ひうっ！ あああ……！ おちんぽ突かれる度にクリも擦れてえ……♪ 皮がむけちゃってえ……♪ 気持ちいい♪ 気持ちよすぎで、ぷしゅぷしゅお汁が洩れちゃってるよお♪」

---

愛衣

「ああんっ♪ 愛液おちんぽでかきだされてえ♪ さっきの蜂蜜も膣中から出て来てえ♪ エッチな香りが凄いよお……♪ 種付けエッチ激しくてしゅごいのおっ♪」

---

愛衣

「おちんぽパンパン♪ おちんぽパンパン♪ もっと激しく腰振って♪ もっと私のこと壊しちゃうくらい激しくパンパンしてえ♪」

---

愛衣

「私もあなたがもっと元気になってくれるように……お・み・み♪ pまんこ突かれながらぺろぺろしてあげるね♪」

---

愛衣

「はむっ♪ ちゅっ、ちゅぶくちゅっ♪ ちゅっ、ちゅううう……れろれろ……ちゅっ、れちゅっ……れろれろ……んちゅっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪」

---

---

愛衣

「んゝちゅっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪ 好き♪ すき  
すきい♪ ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、  
♪」

愛衣

「んっ、んんっ……ちゅっ♪ ちゅっ、ちゅっ♪  
すきい♪ おちんぽ好き♪ おまんこもつと突い  
てえ♪ んちゅっ♪ れろれろ……ちゅっ、  
ちゅっ♪」

愛衣

「あゝむっ、くちゅっ……れるっ、くちゅぴちゅっ  
……ちゅっ……んちゅっ……れろっ……れろれ  
ろっ……んゝちゅっ……ちゅぱっ……んっ……れ  
るっ……くちゅ……」

愛衣

「あっ、やん♪ おちんぽ膣中で震えてる……♪  
耳舐められるの気に入ってくれてるんだ……あっ  
♪ あん♪」

愛衣

「え、えへへっ♪ 耳舐め、して欲しかったらいつ  
でも言ってくれていいからね♪ んっ、ひゃっ、  
ひゃんんっ♪ 朝起きる時も、お耳掃除する時  
もっ♪ ご飯食べる時も、お風呂入る時もお♪  
も、もちろん、エッチしてる時も♪ いつだって  
お耳ぺろしてあげるのおっ♪」

愛衣

「お嫁さんの愛衣が、んっ、あんっ♪ あなたの為  
に、毎日全身でご奉仕してあげるのお♪ エッチ  
な事してあげるのお♪」

---

---

愛衣

「あうう……ふうっ、ひゃあんっ♪ 好き、大好きい……んんっ、ちゅっ♪ もっとあなたの気持ちよくなる顔みたいのお……♪」

愛衣

「んんっ！ はあっ！ やっ、やんっ♪ だ、だからあ……んっ、はあ、反対のお耳も、私のお口でぺろぺろしてあげる♪」

愛衣

「はゝむっ♪ んちゅっ、ちゅっ……れちゅっ……ちゅぷっ……れるっ、くちゅぴちゅっ……ちゅっ……んちゅっ……れろっ……れろれろっ……んゝちゅっ……ちゅぱっ……んっ……れるっ……くちゅ……」

愛衣

「んっ、んんっ……もっと……んっ、ちゅっ……くちゅっ……じゅるっ……ちゅっ……ちゅぱっ……はあ……はあ……激しく……すりゆね……ふう……スウ————」

愛衣

「はぷっ！ んぴちゅ、くちゅ……！ んんっ！ はあ……んっ……はあ……れろれろ……んっ、くちゅ……！ ぐちゅ、ぴちゅ……！ ふああ……んちゅっ……れろれろ……！」

愛衣

「んああっ！ はあ、あひやっ！ ら、らめえ……！ お耳舐めてるのにそんな腰、思いつ切り突かれちゃ……ひやっ、やあっ♪ ペロペロ集中できないよお……♪ あっ、あっ、ああっ♪」

---



---

愛衣

「これえ……本気ピストン……らめえ！ 気持ちいいのお♪ 必ず孕ませるって気持ちがおちんぽを伝って分かつちゃう……分からされちゃうよお……♪」

愛衣

「ああんっ！ あっ、んひいいっ！ おちんぽ強い！ おちんぽ激しい！！ おちんぽ大しゅきいいっ！！！」

愛衣

「あっ、あっ、あっ、ああっ♪ ダメ！ ダメダメダメダメ！ だめええっ！！」

愛衣

「んひやあああああっ！！ やあっ！！ 種付けプレスされながらおまんこ吹いちやつてるのお♪ 気持ちよすぎておまんこおもらししちゃってるのお♪」

愛衣

「あっ、ひひひひひいっ！！ またあっ！ またお潮吹いてっ……止まらなくてえ！ 気持ちいいのがビクビクきちゃってえ♪ おまんこらめえ……おかひくなる……おかひくなっひやうよお……♪」

愛衣

「あ、ああっ！ 潮吹きながらおまんこパンパンされてえっ！ 赤ちゃんのお部屋押し広げられちゃってえ……♪ おまんこもうだめえ……！ 孕むう……孕みたがっちゃってるよお……♪」

---

愛衣

「おまんこおっ、おおっ！ んひやああっ、あああ  
んっ！ イクウっ！ ううっ！ 潮吹いたのにま  
た、イつくううっ！！」

愛衣

「らめえっ！！ おまんこイクの止まらない  
よおっ！！ 痙攣止まんないのおっ！ 気持ちよ  
しゅぎるう……おまんこお……おまんこお……  
♪」

愛衣

「しゅきい……♪ おまんこせつくしゅう……♪  
孕ませせつくしゅらいしゅきい……♪ おまんこ  
こわしてえ……♪ ちっちゃいロリおまんこ孕ま  
しえてええっ♪」

愛衣

「お、っ、お、お、っ……♪ イグウ……♪ まらい  
ぐのおおおっ……♪ んひやああっ！！ らめえ  
……！ おまんこトんじやう、う、う、……お、か  
し、く、な、る、う、う、……♪」

愛衣

「はあ、はあ……ひっ、ひうう……あっ、ああっ…  
…♪ お、おまんこの中で、おちんぽ大きくなっ  
てえ……腰振りながらすっごく震えちゃっててえ  
……♪ あなたもイきそうなんだね？ おちんぽ  
ぴゅっぴゅしちやいたいんだね♪」

愛衣

「このまま膣中に、んひうっ！ ふああっ！ ああ  
んっ、だ、出してえ♪ あなたの精液で愛衣の事  
孕ませてえ♪ あなたとの赤ちゃん作らせてえ  
♪」

---

愛衣

「おまんこにおちんぼミルク！ 出してっ！  
ひゃあっ、ああんっ！ 子宮の奥に出してえ♪  
種付けしてえ♪ あなただけの愛衣にしてえええ  
えええ！！！」

愛衣

「あっ、ああっ、ああああっ！！ イクッ！ イク  
イクイクイクッ！！ イッ……クウウウウウ  
ウ！！！」

愛衣

「あっ、ひゃああああああああっ！！！」

愛衣

「んひゃああッ！ あっ、ああああッ！！ 出て  
るうッ！ おまんこの膣中に種付けミルクいっば  
い出てりゅのおっ！！！」

愛衣

「子宮が精液で満たされてえ……♪ イクッ、また  
イッ……クウウウ！！！」

愛衣

「んひゃああっ！！ おまんこまたイっひゃっ  
たああ……♪ おまんこ熱い……♪ しゅごく  
あちゅいのお……♪ 蕩けちゃうう……おまんこ  
精液で蕩けちゃうう……♪」

愛衣

「あっ、ひゃうううっ……♪ ああ……また出て  
りゅう……♪ おまんこの膣中でまた射精して  
りゅう……♪ 私の事絶対孕ませるつもりなん  
だあ……♪ えへへへ……♪ いいよお……♪  
もっろ出ひてえ♪ 愛衣に赤ちゃん作らせてえ……  
……♪」

---

---

愛衣

「全部おまんこで飲んであげりゅからあ……♪ あ  
なたのおちんぽでおまんこに栓してえ……♪ こ  
ぼさない様に、ずっとこのまま入れててえ……  
♪」

愛衣

「んっ、んひゃっ！ 子宮にとくとくって、どろど  
ろした精液注がれてるの分かつちゃう……♪ 今  
私たちが作られちゃってるんだよね……ああ  
……♪ 幸せだよお……♪」

愛衣

「えへへ……♪ 好き、スキスキ♪ 大好きい  
♪ 幸せすぎて、もうあなた以外の事何も考えら  
れないのお♪ すきい……愛してる、誰よりも愛  
してるよお♪」

愛衣

「んーちゅっ♪ ちゅっ、ちゅ♪ ああー♪ もう  
ダメえー♪ あれだけおまんこイカされちゃった  
のに、またあなたのおちんぽ欲しくなっちゃって  
……もっともーっつと、エッチしたいって思っ  
ちやってるの♪」

愛衣

「ねえ、あなたはどうか？ もっとおまんこに種付け  
セックスできる？ ……って、わっ！ おちんぽ  
腔中でまた大きくなっちゃって……」

愛衣

「あはは♪ すごいやる気満々だね♪ もっと私の  
事種付けして孕ませたいって思ってくれて、すっ  
ごく嬉しいな♪」

---

愛衣

「じゃあこのまま〽人とも気を失っちゃうくらいまでいっぱいいいっぱいエッチして、双子の赤ちゃんが出来ちゃうくらい、いっぱい種付けエッチしよ？ ね？」

●トラック０６：

シチュ…激しいエッチも終わり、いつの間にか寝室のベッド上で気を失ってた人。愛衣が目覚めると最愛の人が目の前で寝息をたてていて……

舞台…トラック０２と同様の寝室

愛衣

「ん、んっ……んっ……ふああ……（欠伸）  
んにゃ……ここは……ベッド？ あれ、いつの間  
に移動したんだっけ……？ エッチすぎて記憶  
にないかもお……」

愛衣

「旦那様は……って、あっ……ふふ♪ すぐ隣で  
ぐっすり眠っちゃってる♪ えへへ♪ 相変わ  
らず可愛い寝顔♪」

愛衣

「ん、ちゅっ♪ 今日はお疲れ様。いっぱいエッチ  
してくれて……こんなに気持ちよくしてくれて、  
最高の一日だったよ♪」

愛衣

「今もお腹の腔中であなたの精液がたぶたぶしてる  
のがわかつちゃうの……えへへ♪ これ、間違  
いなく孕んじやってるよね♪ 嬉しい……♪ 嬉  
しすぎて泣いちゃいそう……♪」

愛衣

「この小さなお腹の中にあなたと私の愛の結晶があ  
るって考えると、にやけが止まらないよおっ♪」

---

愛衣

「これからきつと、~人っきりの生活とは違った生活になっていっぱい忙しいこともあると思うけど、あなたと一緒になら何でもできるって思えるから……♪」

愛衣

「だからね？　これから先もずっと一緒にいて？　ずっと私のことを愛して？　私もあなたのこと一生好きでいるから……♪　あなた以外の人の事なんて考えられないくらい大好きだから……♪」

愛衣

「私と私たちの赤ちゃんのこと、よろしくお願いします♪」

---